

Title	吐魯番出土文物研究会会報 第1号（大会報告号）
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 1 p.1-p.4
Issue Date	1988-08-26
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78811
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

吐魯番出土文物研究会会報

第1号

1988年8月26日

(大会報告号)

吐魯番出土文物研究会

【発足にあたって】

昨年夏に、若手を中心とする有志者5人で「吐魯番出土文物研究会」を結成いたしました。本会は、主としてトゥルファン出土の諸資料を研究の対象とし、会員各自のテーマに沿ってその分析・検討を深化させることを目的とするものです。同時に、会として得られる研究成果を公にすること、また中国における当該分野の研究者との交流を促進することも、今後の会の重要な活動と考えています。何分、有志者によるささやかな会ですが、少しでもトゥルファン出土資料の解明に寄与するところがあればと思っています。本会に対する忌憚の無い御意見・御助言の程お願い申し上げます。

<活動記録>

第1回大会

日時 1987年8月26日(水) - 28日(金)

場所 京都堀川会館

参加者(敬称略・五十音順)

荒川正晴(早稲田大学第二文学部)

片山章雄(東洋文庫)

白須浄真(広島県立廿日市西高等学校)

関尾史郎(新潟大学人文学部)

町田隆吉(東京学芸大学附属高等学校)

(8月27日・28日、龍谷大学・大宮図書館にて大谷文書
閲覧)

(発表要旨)

●荒川正晴 「唐の中央アジア進出と交通制度」

近時出土のトゥルファン文書には、比較的多くの交通制度に関する文書断片が含まれている。そのため、現在までにこれら文書の分析を通じて、唐の交通運営の実態を検討する論稿が、数多く中国より発表されている。しかしながら、唐の交通制度といっても、時代的な変遷、また内地州県とは諸般の事情の異なる西北のオアシス地域に施行されたことを十分に考慮しなければならない。今後各断片を広く唐の交通史料として活用してゆくためにも、当該地の特殊性と唐側のこの地に対する軍事支配の動向を踏まえた上で、改めてその全容を明確にする必要がある。

今回の発表は、こうした観点から、特に従来看過されてきた観のある軍事物資の輸送面に焦点を充て、河西以西地域で施行された交通制度の実態の一端を明らかにし、併せて唐の中央アジア支配の性格を考えたものである。

●片山章雄 「トゥルファン出土史料と突厥」

トゥルファン文書に散見するテュルク族の官称号の問題から、表題に掲げたテーマに関してどのような研究方法の展望がのぞまれるか、その可能性を探った。特に、既に『文物』（一九八六年第十二期）誌上に発表された姜伯勤氏の論稿（「高昌文書中所見的铁勒人」）を取り上げ、文書中に見える「部族名+官称号」に対する同氏の解釈の再検討を試みた。今後、突厥の高昌支配のあり方も含めて、様々な角度からの分析を必要とするものと思われる。

●白須浄真 「中国訪問報告」

1987年7月24日－8月15日にわたって、新疆文化庁の招聘によりトゥルファン・ウルムチ周辺を訪問した。訪問した研究機関や博物館及び参観した遺跡を日程に即してあげれば、以下の如くである。

① 北京（7月26日－8月2日）

a、中国社会科学院 b、国家文物局古文獻研究室 c、中国歴史博物館

②ウルムチ（8月2日－6日）

a、新疆維吾爾自治区博物館 b、ウラボー（烏拉泊）古城（ウルムチ市南郊、烏拉泊水庫南1kmの平原）

③トゥルファン（8月6日－10日）

a、白水澗道 b、交河故城 c、高昌故城（β寺、作坊、α寺、z寺、m寺【安周造寺碑出土確認できず】、p寺【大谷探検隊のオットセ・ヲゴル】「三十人の兒子」『新西域記』上、p. 369）

d、台蔵塔【大谷探検隊のタイジャン・トラ】（カラホージャ古墳群1000分の1実測図の三角点の一つ） e、ベゼクリク千仏洞 f、トユク・マザール g、トユク溝千仏洞 h、シルキップ i、ラムジン・オアシス j、ラムジン西の烽火台 k、スバシ・センギムのオアシス l、センギム・アギズの千仏洞 m、吐魯番県文管所 n、南平城跡（讓布工商古城） o、塩山

④ ウルムチ（8月10日－11日）

a、新疆維吾爾自治区博物館・研究棟

⑤ ジムサル（8月12日）

a、北庭都護府跡（西壁・北壁を中心に参観） b、西大寺

参観した史跡の多くは、解放後初めて外国人に公開されたもので、今後その詳細な調査報告が発表されることが期待される。現在、この参観の概要の一部（トユク溝千仏洞と西大寺）は、1987年10月3日の『朝日新聞』（大阪本社発行版第5面）に掲載されている。また併せて拙稿「清末民初のウルムチ（迪化城）の景観と大谷探検隊の記録－1987年訪中報告（3）」『東洋史苑』30・31合併号（1988・2）参照。なお、中国社会科学院では、余太山氏より『中亜文化研究協会会員名単』（1983・2・26）の贈呈をうける。

●関尾史郎 「トゥルフアン新出高昌国税制関係文書について」

本報告では、現在『吐魯番出土文書』に「入租銭条記」と題された、計46点にのぼる高昌国時代の条記文書の分析を行なった。

条記文書とは、納税の折りに、納入者が官府から受け取る領収書としての性格をもち、後の唐代における納税抄類との比較を必要とするものである。原則として元号を併記せず、また官名・税名等の略記が多いなど、正式な領収書というよりは、簡略なレシートと呼ぶにふさわしく、これ自体は半永久的な存続は決して期待されない性質の文書である。

こうした性格をもつ条記文書には、その税目として田租・丁税・刺薪・遠行馬価銭等があり、賦課年月及び受取書交付者（納入先）の官職とそのメンバーの分析を通じて、税目によって納入先、即ち窓口が決っていたことが明かとなった。その結果、いままで断簡のため税目等の性格が不明であったものも、その納入先によって税の種類が明らかになるものが多く認められる。

そして、文書の内容と書式よりの検討から、窓口となる官衙が、中央にあった可能性が極めて高く、納税者は地方にあって直接中央にまで税を納めねばならない実態がうかんできた。また、さらに注目されるのは、高昌国では、税負担が在官者に及んでいたことであり、彼らは民と同様に、「俗」として、「僧」に対置するものであったことが知られる。なお、本報告については、「トゥルフアン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究」として『人文科学研究』に掲載予定である。

●町田隆吉 「吐魯番出土文書とコンピュータ」

今回は、吐魯番文書をより有効に活用するために、コンピュータを今後いかに利用したら良いのか、利用の現状の紹介とその可能性を探った。既に作成をした『吐魯番出土文書』第1冊の索引（『東京学芸大学附属高等学校大泉校舎研究紀要』第11集1987年）は、将来中国側で出版の予定とされる『吐魯番出土文書』の総合的な索引が出されるまでの、使用に便なる索引のサンプル作成を試みたものである。ここでは、人名・地名・官職名によって索引の分類整理を行なったが、当然より理想的には文書の全文の入力が望ましいことは言うまでもない。ただし、当該文書に異体字などが多いこともあり、第二水準までの漢字ソフトでは入力も難しいものも多く、文書の全文をそのまま入力するまでには相当の困難をともなうことが予想される。現在、模索中ながらデータベース「桐」を利用して、その入力を試行中である。

コンピュータによる情報の具体的な処理方法やその活用に関しては、今後煮つめるべき問題点は多々残されているが、同文書所収の末紀年文書の年代決定や、今後発見が期待される文書類との関連を探る上でも、こうした作業を継続してゆく必要があろう。

龍谷大学の宮内図書では、8月27日・28日両日に、限られた時間ではあったが大谷文書を実見する機会に恵まれた。閲覧申請した文書の中には、建元22年・延昌40年の随葬衣物疏などがあったが、これらは所謂、橘文書と呼ばれるものに属している。申請した時点では、橘文書に関しては、熊谷宣夫氏による「橘師将来吐魯番出土紀年文書」（『美術研究』第213号、1960年、pp. 23-37）に付せられた番号によって申請したが、現在龍谷大学・宮内図書では貴重図書の扱いで、『橘文書・流沙残闕』と題された、橘文書と『流沙残闕』を合わせた焼付け写真が備え付けられている（龍谷大学図書蔵・大谷探検隊将来『橘文書・流沙残闕』昭和59年）。『流沙残闕』とは、熊谷氏によれば、「大谷探検隊の第三回（橘瑞超・吉川小一郎氏）の将来品中よりの経典・古文書胡語文献学の典型を示すための貼合わせ帖である」とされる（熊谷宣夫「吐魯番将来版画「須大拏本生図」解説」『龍谷大学論集』第351号、1956年、pp. 99-101 同「大谷ミッション将来の版画須大拏本生図について」『文化』第20巻第2号、1956年、pp. 47-60）。同写真版を見ると、仏典以外のものは、168-180番の間に分類・整理されている。ちなみに、168番は、建元22年随葬衣物疏、169番は延昌40年随葬衣物疏である。

またその他、大谷文書の中に、延寿元年（624）6月の紀年をもつ、遠行馬価銭の納入を命じた符に直接接合するものが認められること（大谷文書1310号と1466号、同1497号と1501号、詳細は次号以降にて報告の予定）、またトゥルファン出土の敦煌文書中にも接合するものがあることなどを確認した（大谷文書3367号と3368号、荒川正晴「唐の中央アジア支配と墨離の吐谷渾＜上＞—トゥルファン・アスターナ出土の豆盧軍牒の検討を中心として—」『史滴』第9号、1988年1月、p. 40、46参照）。

なお大谷文書原本の閲覧にあたっては、龍谷大学の小田義久先生に格別の御尽力をたまわった。また宮内図書の西山信行氏並びに中田篤郎・北村高両氏にも種々御配慮いただいた。記して謝意を表したい。

（この第1回大会の概要は、1987年9月19日に開かれた内陸アジア出土古文献研究会で報告した。）

【今後の活動方針】

今後、吐魯番出土文物研究会という名のもとに、毎年夏休みを利用して京都において大会を開き、会員各自の研究発表を行なうと同時に、あわせて龍谷大学・宮内図書で大谷文書の閲覧を行なう予定です。

また会の活動の記録を中心として本会報を継続して発行することを申し合わせましたので、今後に御期待下さい。

事務局（連絡先） 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴 方

TEL 0424 (81) 4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)